

三浦 雅士（みうら・まさし）

1、プロフィール

「ユリイカ」「現代思想」の編集長を経て批評活動を始める。文学はもちろん、思想、科学、演劇、最近はバレエと、その範囲は実に広い。自己言及は鋭く、そして深い。

<生没>

1946(昭和21)年12月17日～

<代表作>

『私という現象』『メランコリーの水脈』『寺山修司』『小説という植民地』『身体の零度』『バレエの現代』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。大鰐小、柏崎小、八戸二中、青森第一中を経て弘前高校へ。卒業後上京し、現在は東京在住。

2、作家解説

現在、活躍している文芸評論家の一人。昭和21年、弘前市に生まれる。40年青森県立弘前高等学校卒業。44年、青土社入社。詩と批評誌「ユリイカ」復刊に参加。47年、同誌の編集長。50年、思想誌「現代思想」編集長へ。57年退社。

20代の若き編集長は、膨大な読書量に裏打ちされた新しい企画を次々と世に問い、注目を浴びた。文学、哲学、美術、思想、数学、物理、言語学、精神分析学、文化人類学、動物行動学等、その知的好奇心は、驚くべきほど広範囲にわたる。そこで培養した「知」が後の著作群に結実する。また、そのプロセスで出会った多くの文学者、学者、芸術家との交流はその後の活躍に大きな影響を与えた。山口昌男、大岡信などの他に寺山修司もその中の一人である。

51年ごろから執筆活動を始める。56年、初めての評論集『私という現象』を刊行。「文学の思考枠を問い直す意気にあふれている」と評価される。「読売新聞」

「朝日ジャーナル」書評委員。59年、作家論集『メランコリーの水脈』で第6回「サントリー学芸賞」受賞。約2年間コロンビア大学客員研究員。滞在中ダンス、オペラなどのパフォーマンス・アーツに強い関心を持つ。62年作家論『寺山修司』刊行。平成2年、アフリカを旅行。パリ、ミュンヘンなども視察。セゾン現代美術館理事、出版社新書館顧問、季刊誌「アスティオン」編集委員に就任。3年、新書館刊行の「ダンスマガジン」「アートエクスプレス」編集長に就任する。モスクワ、レニングラード、東欧諸国を視察。日本文化サミットに参加、パリに滞在。評論集「小説という植民地」で第29回「藤村記念歷程賞」受賞。6年、「大航海」編集長に就任。『身体の零度』刊行（平成7年度読売文学賞受賞）。7年、『バレエの現代』刊行。

その他の著作として、『幻のもうひとり』『主体の変容』『夢の明るい鏡』『自分が死ぬということ』『死の視線』『疑問の網状組織へ』、対談集には『語りの宇宙』『この本がいい』などがある。

3、資料紹介

○『私という現象－同時代を読む』

図書

1981(昭和56)年1月26日

195mm×135mm

冬樹社刊行。処女出版。「自己とは何か」、「現象としての自己、現象としての私」と現在、現代の社会とどう関わるのかを問う刺激的な評論である。以後、この「自己」「主体」への研究を深めていく。批評言語に斬新な視角を切りひらいた、と注目を浴びた。

○『メランコリーの水脈』

図書

1984(昭和58)年4月15日

195mm×135mm

福武書店刊行。現代の代表的な作家、三島由紀夫、武田泰淳、大岡昇平、吉行淳之介、安岡章太郎、児島信夫、高橋和巳、井上光晴、大江健三郎、安部公

房、筒井康隆の共通項は「メランコリー」にあると断ずる。第6回「サントリー学芸賞」受賞作品。

○『寺山修司－鏡のなかの言葉』

図書

1987(昭和 62)年4月 10 日

195mm×135mm

新書館刊行。「理由もなく反撥していた」寺山修司に、著者がなぜ魅かれていったか。寺山は「見る自分と見られる自分」の二つの次元の「自己」を生涯追いつけたという。そのプロセスに著者もまた「自己」を見る。寺山を知る必読の作家論。

○『小説という植民地』

図書

1991(平成3)年7月 22 日

195mm×135mm

福武書店刊行。著者の膨大な読書量に裏打ちされた評論集。植民地と小説がどう結びつくのか。その鍵は何か。それは「世界を俯瞰する視線」にあると解き、「個性」の崩壊を予告する。他に音楽、舞踏などを分析する。第 29 回「藤村記念歷程賞」受賞作品。